

第5章

王たちの幕間

ハビブッラー・カラカーニーとナーディル・シャーの短い治世

ハビブッラー・カラカーニーの台頭 ― その論争と遺産

アマーヌッラー・ハーンの退位に続き、アフガニスタンは権力の空白状態に陥った。この混乱の時期に、カーブルの北に位置するコーヒスターン地方出身の卑しい身分の村人、ハビブッラー・カラカーニーが台頭した。彼は一部の歴史家から軽蔑的な意味を込めて「バチャ・サッカーオ（＝水汲みの息子）」と呼ばれている。ハビブッラー・カラカーニーはこの機会を逃さず、1929年1月19日にカーブルを占領した。

ハビブッラー・カラカーニーの人物像に対する歴史的評価は分かれている。ある歴史家たちは、彼を社会的規範を重んじ、抑圧に立ち向かった戦士であり、弱者の擁護者であったとみなす。一方で、他の者たちは、政治的混乱を利用して権力を掌握した好機主義者として彼を非難している。このような人物像の二面性はホラーサーンの歴史に繰り返し現れるテーマであり、英雄的行動と庶民擁護との複雑な交錯を映し出している。

一部の歴史家は、ハビブッラー・カラカーニーとイギリス当局との間に潜在的なつながりがあった可能性を推測している。しかし、これまでのところ、そのような関係を裏づける文書的証拠は存在しない。ハビブッラー・カラカーニーに対する疑惑の多くは、敵対する民族集団によって流布されたものであり、彼がタジク人であったことに起因している可能性がある。アフガニスタンの歴史において、対立する民族を貶めることは、常に政治的な手段として用いられてきた。

「グレート・ゲーム」は、アフガニスタンの政治情勢に深い影響を及ぼした。アマーヌッラー・ハーン退位後の混乱期には、イギリスとソビエト連邦の双方がこの地域における自国の利益を守ろうと動いた。ソビエト連邦はアマーヌッラー・ハーン時代に確立された関係を維持しようと努める一方、イギリスはインド亜大陸における戦略的利害の観点から、アフガニスタンの安定と外交的立場に強い関心を抱いていた。

ハビブッラー・カラカーニーの短い臨時政権は多くの困難に直面し、イギリスからの承認を得ることはなかった。イギリスはむしろナーディル・シャーへの権力移譲を支援することに関心を示し、ペシャーワルにおいて駐英大使サー・フランシス・ハンフリーズとナーディル・シャーが数度にわたって会談した。その席上でハンフリーズは、ナーディル・シ

シャーに対し、前王アマーヌッラー・ハーンへの権力返還を控えるよう助言した。

ハビブッラー・カラカーニーの失脚 ― 裏切りと処刑

ナーディル・シャーは、ハビブッラー・カラカーニーを打倒した後、主としてパクティア地方のパシュトゥーン部族の支援を受け、1929年10月15日にカーブルへ入城した。ナーディル・シャーがカーブルに到着するまでの期間は、不安定と混乱に満ち、市内では略奪と暴動が広がり、政府庁舎や王宮が損壊した。ナーディル・シャーは、自らの入城と権力掌握を容易にするため、こうした暴動を黙認したとも伝えられている。

権力を失ったハビブッラー・カラカーニーは、カーブル北方のコーヒスターン地方へ退却し、闘争継続の意志を持っていた。しかし最終的に、ナーディル・シャーが派遣した長老や聖職者らの説得を受け入れ、彼は投降した。国王の安全保障の約束と宗教指導者を介した保証を信じ、ハビブッラー・カラカーニーとその同志たちは無防備のまま自らを差し出した。

しかし、この降伏行為は致命的な誤りとなった。1929年11月1日、彼の即位を支援したパクティア部族の要求と圧力に屈し、ナーディル・シャーはハビブッラー・カラカーニーおよびその仲間たちの絞首刑を命じた。こうして、新たに樹立された王権への潜在的な脅威を排除したのである。

ハビブッラー・カラカーニーの短くも波乱に満ちた治世は、彼の処刑によって突如終焉を迎えた。だが、この処刑はナーディル・シャーにとって最大の政治的過誤であったとも言われる。それはアフガニスタン国内の民族間の敵対と対立を一層激化させ、その影響は今日に至るまで残っている。

ナーディル・シャーの治世 ― 保守的政策と民族政治的戦略

王位に就いた後、ナーディル・シャーは、アマーヌッラー・ハーンに倣うことなく、決定的に異なる手法をとり、アフガニスタン社会の保守的要素と歩調を合わせた。彼はその支持基盤の中核をなす部族首長や聖職者といった伝統的権力構造に大きく依存した。

ナーディル・シャーの治世を特徴づけたのは、国内の敵対関係の蔓延であった。彼は意図的にこれらの対立を助長し、とくに北部住民と南部部族の間に亀裂を作り出すことで、民族間緊張を悪化させ、すでに複雑なアフガン社会・政治構造をさらに混乱させた。

外交政策において、ナーディル・シャーはイギリスの助言と指導に大いに依存した。歴史

資料によれば、彼はこれらの協議に基づき、詳細を公にはしなかったいくつかの約束をイギリス側と交わしていたことが判明している。

一方、1931年には、部族的・権威主義的・家父長制的性格をもつ諮問機関によってアフガニスタン憲法が承認された。この憲法は、ナーディル・シャーに政治的権力を統合し、反対勢力を抑圧するための法的基盤を与えた。こうした専制的体制を法的に正当化することは、独裁支配に正統性を与えるという懸念を生じさせた。憲法を利用して独裁政権が正統性を得るのを目撃することほど辛いことはない。

その後、政治的不安が続き、混乱の中でナーディル・シャーは1933年11月8日、カーブルの高等学校で開催された公式行事中に暗殺された。この悲劇的な最期は、支配階層間の血の復讐によるものだった。

ナーディル・シャーの短い治世は、アフガニスタンの諸民族間の分裂によって彩られていた。彼は意図的に民族間の敵対関係を助長し、その結果として、社会を脆弱化させ安定が長期にわたって損なわれることとなった。彼の統治の遺産は、民族間の均衡を軽視し、特定の民族の利益を優先させたことの長期的な影響——多民族国家における結束と包摂的統治の破壊——を痛烈に示すものである。